

年次報告書

2022年度(令和4年度)

4年間の学びを、力に変える大学。



教育の敬愛
- 創立100周年 -

敬愛大学 地域連携センター

(目次)

巻頭言	1
1. 沿革	2
2. 歴代管理職	3
3. 組織(2022年度)	3
4. 地域連携センターの位置づけ	4
5. 2022年度実績	6
5-1 生涯学習講座	6
5-2 ボランティア活動・地域連携活動	8
5-3 国際平和や人権を考える講演活動等の開催	13
5-4 学外での発表	13
5-5 年次事業計画の達成度	14
6. 次年度の展望	15

(別表) 事業報告一覧

巻 頭 言

「地域連携センター」の発足からまる6年が経過しました。この3年間は、社会全体が新型コロナウイルスの感染拡大の波にさらされた結果、大学・学生と地域をつなぐことの難しさを実感したものとなりました。そのような中で、大学の地域連携・社会貢献の総合窓口として、「地域の伴走者」としての最前線に立つ努力は、微力ながら積み重ねてきたと考えています。

2022年度を振り返りますと、産学官連携及び地域・社会貢献に関する取り組みでは、本学を含む「ちば産学官連携プラットフォーム」や「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」の活動の充実が挙げられます。プラットフォーム事業での協働により、文部科学省私立大学等改革総合支援事業タイプ3（地域社会への貢献：プラットフォーム型）に5年連続で選定される（2018年度はタイプ5）に至ったことは、客観的にも私たちの日々の地域連携活動と近隣大学との連携が着実に進んでいることも表れだと言えらると思います。

生涯学習講座については、JR稲毛駅前にサテライト・キャンパスとして生涯学習センターを開設して以来の厳しい状況が続き、年度末には大幅な見直しをするに至りました。

ボランティア活動については、まだ千葉市や稲毛の街での大きなイベントで学生が活躍する状況には至らないものの、パラスポーツを通じた共生社会の実現という千葉県・千葉市の大きな施策に結びつく活動が根付いてきたという感があります。また昨年度オミクロン株の流行で中止した東北での震災学習スタディツアーは、再開させることができました。

「ウイズ・コロナ」期を経て、いよいよ「ポスト・コロナ」期を迎え、停滞していた地域連携活動が再開できる 때가やってきました。より多くの学生・教職員が「地域に学ぶ」「地域で学ぶ」ことができるよう、これまで繋いできたご縁を存分に発揮できる2023年度になるよう、務めてまいります。あわせて、来春に控えた千葉敬愛短期大学との業務一元化と大学・短大新棟共用開始に向けて、滞りなく準備を進めてまいります。

引き続き、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

2023年5月

敬愛大学地域連携センター
センター長 藤森 孝幸

1. 沿革

(生涯学習講座)

- 2005年9月 生涯学習講座開講、年度末までにのべ751名が受講。
- 2009年4月 事務分掌再編に伴い、所管部署名が大学運営室に変更される。
- 2016年4月 講座・受講者情報の管理および受講料収納の円滑化のため、運営基幹システム「Smart Academy」および受講料のコンビニエンスストアでの支払決済システムを導入。
「敬愛大学生涯学習センター」をJR稲毛駅前に開設
- 2017年4月 地域連携センターの新設に伴い、所管部署を大学運営室から移管。
- 2018年4月 生涯学習センターを移転し、教室を拡張

(ボランティア活動、地域連携事業)

- 2009年4月 事務分掌再編に伴い、教務学生課学生係が学生支援室に改組。
- 2011年度頃から、学生支援室において学生の正課外活動の活性化のため、ボランティア活動や町内自治会・商店街、稲毛区役所などとの関係を深めはじめる。
- 2011年3月 東日本大震災が発生、有志学生によるボランティア活動が活発化。
- 2011年9月 教員主導による「宮城ボランティア」が開始。
- 2015年3月 千葉市との間で「地域経済活性化に関する連携協定」を締結
- 2015年5月 学生支援室内に、ボランティアセンターが設置される。
- 2016年4月 「宮城ボランティア」の主管が、ボランティアセンターに移管。
- 2017年4月 地域連携センターの新設に伴い、所管部署を学生支援室から移管。

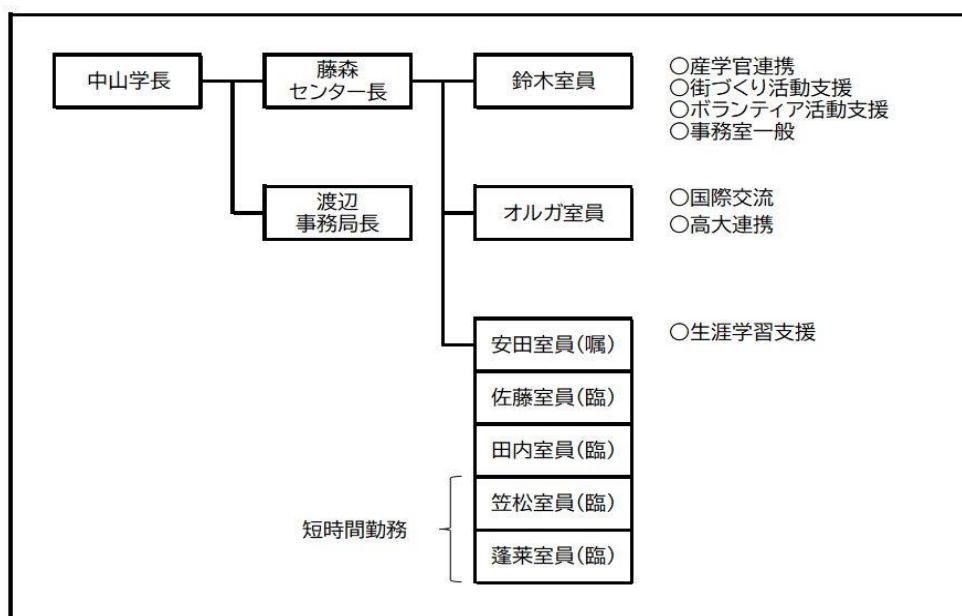
(地域連携センター事業)

- 2017年4月 地域連携センターが新設される。なお地域連携センターは、IR・広報室と同様、学長直属の部署として設置された。
- 2018年8月 「ちば産学官連携プラットフォーム」設立に伴い、副会長校を拝命。
同プラットフォームでは、生涯学習連携事業部会の幹事校を拝命。
- 2019年2月 文部科学省私立大学等総合改革支援事業(タイプ5) 初選定
- 2021年12月 「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」に参画
- 2022年3月 大学基準協会の認証評価で、「適合」の評価をいただく。
あわせて「長所・特色」の一つとして「学生・教員・地域経済と相互連携した地域の特性に根差した地域貢献活動」がとりあげられる。
- 2023年3月 文部科学省私立大学等総合改革支援事業(タイプ3)に、4年連続で選定される。

2. 歴代管理職

2017年4月1日	地域連携センターの新設に伴い、 小阪新造（現：アドミッションセンター長）がセンター長に、藤森孝幸が事務室長に就任。
2019年4月1日	小阪センター長がアドミッションセンター長に異動となり、中山幸夫副学長（現：大学・短大学長）がセンター長に就任。
2021年4月1日	藤森孝幸がセンター長に就任（事務室長兼務）。

3. 組織（2022年度）



センター長	藤森孝幸（地域連携センター事務室長を兼務）
室員	鈴木紀子
室員（嘱託職員）	安田勝也、パンコーヴァ・オルガ
室員（臨時職員）	佐藤真理子、田内治美、笠松宏、蓬萊美奈子
	※オルガ室員、田内室員、蓬萊室員は、今年度新規採用。

4. 地域連携センターの位置づけ

①地域連携センター規程(2017年4月1日施行)

◆第2条(目的)

センターは、敬愛大学の地域連携、地域貢献の総合窓口として、地域社会、行政、企業との連携を深め、地域の発展に寄与するとともに、本学の教育研究機能の充実を図ることを目的とする。

◆第3条(業務)

センターは、前条の目的を達成するために次の業務を行う。

- (1) 産学官連携及び地域・社会貢献に関する事項
- (2) 生涯学習・公開講座に関する事項
- (3) 地域行事・ボランティア活動等の情報統括に関する事項
- (4) 地域連携に関わる大学内の連絡調整および窓口業務に関する事項

②2022年度部門別事業計画

敬愛大学ビジョン2030に基づく「中期計画'24」および2022年度事業計画

中期計画'24		2022年度事業計画
目標	計画	
VI. 地域連携・社会貢献		
1. 学生と地域との連携、大学間連携、産学官連携を推進し、地域連携センターが学園の地域連携活動の総合窓口としての役割を果たす。	1-1 ボランティア活動に加え、サービスマーケティングの充実注に注力し、学生が地域に学ぶ正課外活動の実践を目指す。	地域連携センター、総合地域研究所が中心となり、「千葉」という地域の特性に根ざした地域貢献事業を推進し、正課・正課外を問わず、全学的に学生・教員・地域経済との相互連携の循環を進める。
	1-2 「ちば産学官連携プラットフォーム」のスキームを活用し、参画大学・短期大学間はもとより、千葉市、市内産業界とも連携した取組を推進、他大学を含む産学官連携の充実を図る。	ちば産学官連携プラットフォーム事業で主に担当する「生涯学習」「地域支援」の分野で引き続き事業を牽引し、改革総合支援事業(タイプ3)の継続的な採択に努める。また「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」等の新規産学官連携事業にも積極的に取り組む。
	1-3 短大の稲毛キャンパス移転を機に、大学だけではなく学園全体の地域連携活動の窓口としての役割を認識し、幅広い社会貢献活動を展開する。	より「大短一体」を意識した事業展開を推進し、大学だけでなく短大の社会貢献・地域連携事業の実践にも協力する。また引き続き、学園高校のボランティア活動、総合的探究活動にも協力する。
2. 生涯学習講座やリカレント教育の充実により、生涯学習センターを生涯学習・リカレント教育の地域拠点として確立する。	2-1 「老後の学び」から「生涯にわたって学び続ける生き方」にシフトした教育コンテンツを提供するため、リカレント教育や履修証明プログラム等のメニュー開発を検討する。	感染症拡大防止に最大限配慮しながら、生涯学習センター講座の再拡大に努める。特に資格取得講座の充実、経営人材育成アカデミーの充実を図り、生涯学習センターの再活性化に注力する。

③2022年度組織目標

令和4年度は、「千葉敬愛学園ビジョン2030」に示されている「地域の伴走者」としての学内外からの期待を的確に捉え、与えられた環境の下、最善の取り組みをめざす。具体的には、

1. 総合地域研究所と協力して、「千葉」という地域の特性に根ざした地域貢献事業を推進し、正課・正課外を問わず、全学的に学生・教員・地域経済との相互連携の循環を進める。
2. ちば産学官連携プラットフォーム事業で主に担当する「生涯学習」等の分野で引き続き事業を牽引し、文部科学省改革総合支援事業の継続的な採択に努める。また「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」等の新規産学官連携事業、東京2020大会のレガシー醸成にも積極的に取り組む。
3. 2年後の短大稲毛復帰を見据え、「大短一体」をより意識した事業を推進すると同時に、系列高校や教育連携高校の社会貢献・地域連携事業の実践にも、積極的に協力する。
4. 感染症蔓延防止に最大限配慮しながら、生涯学習センター講座の再拡大に努める。特に資格取得講座の充実、経営人材育成アカデミーの充実を図り、生涯学習センターの発展に注力する。
5. 所管業務に遺漏なく業務品質の向上を図るため、室員一人ひとりが健康に留意しながら自己啓発に努める。

5-1. 2022年度実績(生涯学習講座)

① コロナ禍における対応

2019年度末から徐々に拡大した新型コロナウイルス(covit-19)感染症の拡大は、それまでの年間500講座、のべ受講者数2,500名の目標を大きく揺るがした。2022年1月～3月にわたる蔓延防止等重点措置が影響し、2022年度当初の申込件数は振るわず、また令和2020・2021年度に実施された「千葉市習いごと応援キャンペーン」(受講料の半額を千葉市が助成する制度)も実施されず、結果としてほぼ一年間を通じて、申込件数の回復には至らなかった。

生涯学習センターでは、独自のガイドラインに照らして、室員・講師や受講生の安全衛生に十分配慮した運営を行い、来訪者全員への検温や手指消毒の徹底、空気清浄機や空調設備を利用した換気などに努めた。千葉市による「新型コロナ感染症対策取組宣言の店」の認証などを通じて、適切な環境で生涯学習事業に取り組めるように配慮した。

しかしながら収支の差を埋めるにはほど遠い現実を直視せざるを得ず、生涯学習センターの縮小を決断し、2023年4月からは入居するこみなど稲毛ビルの5階に再移転し、1教室展開とすることを決めた。



② 講座数、受講者数 (受託運営講座を除く)

講座数	2020年度	2021年度	2022年度
前期	264	113	168
	82	42	126
	31.1%	37.2%	75.0%
後期	103	121	200
	76	89	127
	73.8%	73.6%	63.5%
年間	367	234	368
	158	131	253
	43.1%	56.0%	68.8%

受講者数	2020年度	2021年度	2022年度
前期	335	440	749
後期	489	418	685
年間	824	858	1,434
対2019年度比	38.4%	40.0%	66.9%

2022年度は、新型コロナ感染症に伴う行動制限(緊急事態宣言等)が発出されなかったこともあり、前年度まで講じてきた1教室を稼働させない措置を見直し、4月からは大教室(定員20名)を10名上限、小教室(定員8名)を5名上限とした定員制限を行ったものの、3年ぶりに2教室展開を再開した。しかしのべ受講生数は1,434名と2019年度比で66.9%に留まった。

受講生は同一日時講座、同一講師へのリピート率が高いことから、同一講師で他の日時にも講座を増やしたクラス、また新規に確保した講師のクラスは、講座の魅力を浸透させるのに時間がかかる傾向が強い。また長引くコロナ禍を受けて、新たに学び始めたいという意欲のある方がおられる反面、学習意欲を閉ざしてしまう方も少なくないことが課題である。

なお次年度は講座の精選を行い、「集客ができる講座」を集中的に開講させることをめざす。

③ 受講料収入

(単位:千円)

生涯学習事業収支	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度 (見込)
収入	27,138	5,109	10,725	18,608
支出	33,652	16,906	20,065	27,877
収支	▲6,514	▲11,797	▲9,340	▲9,269

事業収入は受講料収入の増収で前年度比1.73倍となったが、講師料等支出も増加し、高額の支出超過状態が続いている。この状況を踏まえ、2023年度は固定費の軽減(=再移転による賃料の縮減)と講師料の圧縮(=講師・講座の精査)を行うことを決め、事業の継続を進めている。

④ 生涯学習センター(駅前センター)の周知定着

2018年4月に生涯学習センターをこみなと稲毛ビルの6階から3階に移転したことを契機に様々な広報戦略を展開してきたが、現在は生涯学習センターウェブサイトを軸に、「ちば市政だより」(千葉市広報:市内全戸にポスティング配布されている)の3月号と9月号への掲載により、市民への緩やかな浸透を目指す取り組みを継続している(2023年度からは中止する)。



なおミニコミ紙(船橋よみうり等)などの紙面で、講座を紹介していただく機会が増えている。また一般社団法人千葉市産業振興財団では、会員福利厚生サービスとして当センターの講座受講に助成金を出すなど、活用を後押ししていただいている。更に2022年度も、千葉市生涯現役センターによる「シニアのための生涯学習フェスタ」でのプレゼンテーションの場をいただき、Twitterでの講座紹介発信にもアクセルが増えている。

さらに千葉市生涯学習センター(指定管理者:一般社団法人千葉市教育振興財団)から、「利用者懇談会委員」「市民自主企画選考委員」への就任依頼を受け、より深く相互の情報共有などを推進している。

⑤ ちば産学官連携プラットフォーム「ちば学リレー講座」

2018年8月に発足した「ちば産学官連携プラットフォーム」には、現在、千葉市域の私立大学・短期大学12校が参画している。本学はこのプラットフォームで生涯学習連携事業部会の幹事校に任じられていることから、同プラットフォーム事業のひとつである「ちば学リレー講座」を本学生涯学習センターで開講、会場の無償提供および申込受付を請け負った。

2022年度は年間11講座が提供され、うち10講座を当生涯学習センターで開催した。オンデマンド受講者も含め、のべ149名が受講した。無料講座でもあり当センターの収入にはならないものの、結果



として敬愛大学が生涯学習事業に熱心に取り組んでいることを市民の皆様を知っていただく機会となっている。この事業は千葉市にも注目されており、千葉市生涯学習講座情報誌『まなびの森』第34号でもとりあげていただいた(17ページ参照)。

⑥ 運営スタッフの勤務態勢

スタッフの若返りを促すために臨時職員1~2名の契約見直しを検討し、2022年4月1日付で田内治美室員、蓬萊美奈子室員を採用した。なお既に長期にわたり採用している嘱託職員の安田勝也室員、臨時職員の佐藤真理子室員、笠松宏室員については、契約延長の期限を満70歳の年度までとすることを、学長等と確認した。

5-2. 2022年度実績(ボランティア活動、地域連携活動)

① 概要

本学の学生はボランティア活動への関心が高く、当センターが主催・紹介する活動のみならず、大学内外の諸団体における自主的な活動に、多くの学生が参加している。またボランティア活動だけでなく、地域の社会貢献活動にも熱心に参加する姿が見受けられ、それらの経験を日々の正課活動、正課外活動にも活かしているのは、高く評価したい。

感染症の影響が少しずつ落ち着き始めたことを受け、軒並み中止を余儀なくされていた主催事業や地域との協働事業が再開を始めたため、学生が「地域に学ぶ」取り組みが息を吹き返しつつある。

とりわけ2022年度は、「稲毛せんげん通りまつり」や「稲毛あかり祭・夜灯」といった地域での大型イベントは引き続き中止となったものの、千葉県・千葉市が推進する「パラスポーツを通じた共生社会の実現」の取り組みへの協働が大きく増えた。また本学が副会長校を務める「ちば産学官連携プラットフォーム」による大学連携協働事業や、千葉市による小学生向け模擬市長選挙などへの協力、高等学校の学習指導助言といった活動の定着もみられるようになった。

② 主な事例

◆ パラスーツを通じた共生社会の実現への協力

千葉市が東京オリンピック・パラリンピックの競技開催都市となったのを機に一層推進している「パラスポーツの普及」に、本学も全面的に協力している。

3年ぶりに大学祭でのパラスポーツ体験会を実施したほか、「パラスポーツフェスタちば2022(千葉県・千葉市共催)や、稲毛区と区内3大学が共催する「第4回いなげボッチャカップ」をはじめとするボッチャ等の行事には、多くの学生が運営ボランティアや選手として参加してくれたことは、特筆すべき事項である。



さらに今年度初めて開催された「大学対抗シッティングバレーボール交流大会」には、バレーボールサークルに出場を呼びかけ、聖隷クリストファー大学（愛知県）や日本選手権で優勝経験豊富な千葉パイレーツとの対戦を楽しむなど、新たな交流の場を創出することができた。



◆東京2020大会のレガシー創出活動

東京パラリンピックの公式種目である「車いすフェンシング」のレガシー創出のため、競技ボランティア養成の核となっていた4大学（本学の他、植草学園大学、帝京平成大学、千葉大学）の学生・教職員が検討を重ね、車いすフェンシングをモチーフにした千葉発祥の新しいパラスポーツ「ソフトパラフェンシング」を考案した。8月29日には4大学で東京2020大会に関わった学生を集めた同窓会を開催し、その席でソフトパラフェンシングのリリースが実現した。なお本学の大学祭でも体験会を開催したほか、多くの学生や市民に紹介する機会が設けられ、レガシーの定着につなげることができた（詳しくは <http://jspfa.jp/> を参照）。



会に関わった学生を集めた同窓会を開催し、その席でソフトパラフェンシングのリリースが実現した。なお本学の大学祭でも体験会を開催したほか、多くの学生や市民に紹介する機会が設けられ、レガシーの定着につなげることができた（詳しくは <http://jspfa.jp/> を参照）。

◆その他の他大学との連携事業

(1) ちば産学官連携プラットフォーム事業

▶千葉市こども若者市役所

千葉市こども支援課の呼びかけで始まった事業で、高校生と大学生が集まり、千葉市からの課題解決に取り組んできた。本学からも学生有志が参加した。

▶ちば仕事研究塾

オンラインによる地元企業3社による業界研究会を開催した。本学学生もキャリアセンターを通じた周知に応じて参加した。

▶合同オープンキャンパス

プラットフォーム参画校の幅広い学問分野を活かして、高校生向けの模擬授業と個別相談会を開催。本学からは教員1名（国際分野）と職員が参加した。

▶共同FD・SD研修会

帝京平成大学、千葉敬愛短期大学と協力し、「ICTを用いた同時双方向型の遠隔授業について」を本学で開催した（後日オンデマンドでも参画校に配信）。

▶活動報告会

年次活動報告会を、オンライン併用で本学にて開催した。参画校関係者の他、企業・団体、地域住民など41名が出席し、活発な意見交換を行った。

▶フードバンクちばと連携した学生への食糧支援



ちば産学官連携プラットフォームが実施した学生アンケートの結果、独居学生や留学生を中心に、コロナ禍での生活に苦勞する学生もいることから、千葉市やフードバンクちばの協力を得て、学生への食糧支援がおおむね隔月で行われている。2022年度は計6回、白米やレトルト・缶詰食品、

調味料、飲料などの配布を、学生支援室の協力を得ながら実施した。

▶合同ボランティア活動

4月に開催された「ウクライナ支援のための映画上映会」（主催：株式会社レインカラース）、6月に開催された「YohaS」（共催：一般社団法人千葉公園YohaS振興会、千葉市）には、本学を通じて参画校の学生にも参加を呼びかけ、千葉市域の大学全体で協力する形で盛り上げに関わった（本学から30名を超える学生が参加した）。

(2)ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム

設立時参加団体は、イオン環境財団、JFEスチール、303BOOKS、グローバル・スカイ・エディケーション、ZOZO、巧匠開発、千葉銀行、ビジネス・ブレイクスルー、敬愛大学、千葉大学、千葉経済大学、千葉市である（2023年3月にイノビオットが追加加盟）。



小学生向けのワークショップ「西千葉子ども起業塾2022発展コース」「千葉市動物公園の魅力PR動画を作成しよう!」や、起業家教育トークライブ「『楽しい』から始まる学び、そして起業へ」の運営には、本学を含む大学生も参加した。

◆稲毛区、稲毛区内町内自治会活動への参加

- ・稲毛区民まつり 本学大学祭との同日開催として協力
(コラボレーション企画は中止)
- ・区内大型イベントの参加 稲毛せんげん通りまつり、稲毛あかり祭「夜灯」とも、中止
- ・町内自治会、商店街、コミュニティセンター事業への参加
穴川町会盆踊りは3年ぶりに開催。
稲毛東5丁目自治会、穴川商栄会(学友会事業)、シャルム
西千葉自治会(学友会事業)等 中止

◆震災学習スタディツアー2022

2020年度まで「宮城ボランティア」と呼んでいた宮城県でのフィールドワークは、2021年度の中止を経て「震災学習スタディツアー」として実現した。通算11回目となる2022年度の「震災学習スタディツアー」は、『支縁～他人ごとを「自分ごと」に』をテーマに、9月11日～13日の2泊3日で開催、学生22名が参加した。



1年半ぶりの開催となったものの、東日本大震災から11年6ヶ月の月命日を訪れた宮城で迎え、名取市と石巻市で時間をかけて現地踏査を実施し、学びを深めることができた。（本事業では、千葉市観光バス活用促進事業の助成を受けた。）

◆千葉県夢チャレンジ体験スクール「キャリア教育しごと体験スクール」



コロナ禍による協力企業減、また学校の夏休みが短縮されたことから事業規模が縮小されたが、本学学生チューター7名が中高生31名の指導に熱心にあたってくれた。特に夏季休業中に4日間連続（企業

等での仕事体験2日間および前後1日ずつの研修）での学生スタッフの活動はめざましいものがあり、県教委や参加中高生からの評価は、極めて高いものであった。

事業への協力は次年度も継続していくが、毎年よりよいメニューになるよう、県教委との協議も継続している。

◆第5回英語教師授業カブラッシュアップセミナー

11月27日に、「新学習指導要領に基づく授業改革及び指導と一体化した学習評価」をテーマに開催した。

講師には、入ノ内昌徳先生（文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室 教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部教育課程調査官）、花沢典行先生（茨城県立水戸第一高等学校教諭）、一三真先生（千葉市立小中台中小学校教諭）および本学英語教育開発センターの先生方をお招きした。受講者数は45名、加えて本学学生が22名受講した。



この年から新学習指導要領が高等学校でも順次導入されていることから、指導と学習評価の一体化を大きなテーマとしたこと、初めて文科省の教科調査官を講師にお招きしたこと、また本学で教職課程を履修している学生も一緒に受講できたことなどの点で、価値あるセミナーとすることができた。

◆県内高等学校との連携事業

2019年度に協定締結した市立稲毛高校とは、今年度も「総合的探求学習の時間」の指導助言やグローバル企業見学会などに年間を通じて協力した。1年生の「総合的探求学習の時間」には経済学部八木直人准教授、金珍淑准教授、遠藤貴美子准教授および藤森センター長を派遣し、他大学の教員と共にフィールドワークの成果発表に助言指導を行った。

また同校に国際教養科があることから実施しているグローバル企業見学会では、地元企業でもある千葉共同サイロ株式会社の見学会をコーディネートした。人数が少なかったものの、参加生徒から高い関心と訪問先からの高評価をいただくことができた。



◆文科省私立大学等改革総合支援事業(タイプ3)

2018年8月に発足した「ちば産学官連携プラットフォーム」では、本学は主に「生涯学習」「ボランティア」「大賀ハス開花70周年記念事業」「高校生の福祉的支援」等の事業に関わった。本学としての主な取り組みは以下の通り。

① 生涯学習

ちば学リレー講座(全11回)のうち、本学からは佐竹恒彦准教授が「ちばの起業」テーマに講師をお務めいただいた。また公民館等の求めに応じて、参画校教員の講師マッチングを実施、本学からは水口章教授を紹介した。

② 社会人の学び直し支援プログラム(ICTスキル講座)

本学からは大塚慎太郎准教授が「AI・データサイエンスへのいざない」をテーマに講師をお務めいただき、令和4年4月からオンデマンド配信されている。

③ 参画校教職員への講師派遣

藤森センター長を稲毛区ボランティアセンター主催の「高校生・大学生のための災害ボランティア講座」の講師に派遣した。

④ 大賀ハス開花70周年記念事業

2021年度末から行われてきた学生ワークショップ(全5回)には、本学学生2名及び職員が参加。このワークショップで発案されたモザイクアート製作は、千葉市の開花70周年事業にも位置づけられ、ペリエ千葉エキナカや千葉公園蓮華亭でも展示された。

⑤ 文部科学省私立大学等総合改革支援事業(タイプ3:プラットフォーム型)

には、植草学園大・短大、神田外語大、敬愛大、淑徳大、千葉敬愛短大、千葉経済大・短大、千葉明德短大、帝京平成大の10校が共同で申請に取り組み、3月に選定された。本学がタイプ3選定により獲得した補助金額は、特別補助のみで850万円であった。



5-3. 2022年度実績(国際平和や人権を考える講演活動等の開催)

2022年2月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻により、本学卒業生のウクライナ人、パンコーヴァ・オルガさんがご家族と来日避難したことを受け、4月18日付で地域連携センターの嘱託職員に採用された。

オルガ室員の業務としては、外国人留学生への生活面での助言や入学相談業務、教員の授業補助業務、そして①自身の経験を記録すること、②その記録を元に学内外の若者に自身の経験を伝えることを課した。オルガ室員は、学内ではCollege Englishやゼミを中心に各教室を積極的に訪ね、また学外では表の通り精力的に講演活動を行い、誠実に業務を遂行した。

なお地域連携センターでは、一緒に来日されたご家族(ご子息、お母様)の生活支援にも細かく気を配りつつ、静穏な避難生活の実現に努めた。とりわけ報道機関からの依頼に



は、IR・広報室の尽力で4月末に学内で共同記者会見を開くと共に、以後の取材対応はIR・広報室に窓口を一本化し、本人の心労軽減に努めた。

No.	派遣先	対象	参加者数	派遣日
1	千葉県立安房高等学校	1~3年	720名	2022/5/24
2	横芝敬愛高等学校	1年	90名	2022/6/14
3	桜美林大学 オンライン	3年	12名	2022/7/6
4	千葉県高等学校教育研究会(人権・同和教育部会)	千葉県高校の人権教育担当教員	120名	2022/7/8
5	松戸市立松戸高等学校 オンライン	1・2年	600名	2022/7/14
6	千葉市教育研究会(小・中学校 社会科部会)	千葉市小・中学校の社会科教員	150名	2022/8/24
7	千葉県立下総高等学校	1~3年	200名	2022/9/8
8	千葉県立佐原白楊高等学校	1年	200名	
9	千葉敬愛高等学校	2年	500名	2022/10/17
10	敬愛大学八日市高等学校	1年	90名	2022/11/10
11	千葉県立土気高等学校	1~3年	900名	2022/11/16
12	徳島県松茂町立松茂中学校	1~3年	360名	2022/11/18
13	千葉県立松尾高等学校	2・3年	20名	2022/12/6
14	千葉県立袖ヶ浦高等学校	1・2年	560名	2023/3/22
15	白子神社(白子町)	氏子	20名	2023/3/24
16	茂原市役所	市民	60名	

5-4. 2022年度実績(学外での発表)

本学の地域連携の取り組みは学外からも注目されており、以下の新聞・学会等で発表の機会をいただいた。

① 私学経営(第568号、私学経営研究所発行)

「地域の伴走者」敬愛大学の地域連携活動 pp.12-19

② 令和5年度第2回千葉県体育学会大会(12月4日)での発表

「東京2020大会のレガシーづくりに関する実践研究～日本ソフトパラフェンシング協会の活動を通じて」

<http://chiba-society-pe.com/meeting.html>

③ 千葉市生涯学習情報誌「まなびの森」(Vol.34、千葉市生涯学習センター、千葉市教育委員会生涯学習振興課発行)

https://chiba-gakushu.jp/adadvice/advice_02/

5-4. 2022年度実績(年次事業計画の達成度)

「中期計画'24」に基づく2022年度事業計画およびその達成状況を、年度末にとりまとめた。全般的には新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けたが、大学間連携の取り組みではA評価を達成できたが、生涯学習事業ではC評価とした。

2022年度事業			中期計画'24の 進捗状況
計画	達成状況	達成度	
地域連携センター、総合地域研究所が中心となり、「千葉」という地域の特性に根ざした地域貢献事業を推進し、正課・正課外を問わず、全学的に学生・教員・地域経済との相互連携の循環を進める。	コロナ禍の影響を受け、稲毛の街の賑わいに寄与する活動が引き続き停滞していることから、十分な取り組みができてきたとは言えない。 他方、「千葉県夢チャレンジ体験スクール」「千葉市・大学連絡会議」や「稲毛区民対話会」「いなげポッチャカップ」をはじめとする千葉県及び千葉市役所、稲毛区役所等との連携協議は深まっており、地域の課題解決に資するための取り組みは推進されている。また「震災学習スタディツアー」や穴川町会の諸行事をはじめとする学生生活動も再開されている。	B	B
ちば産学官連携プラットフォーム事業で主に担当する「生涯学習」「地域支援」の分野で引き続き事業を牽引し、改革総合支援事業(タイプ3)の継続的な採択に努める。また「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」等の新規産学官連携事業にも積極的に取り組む。	ちば産学官連携プラットフォームの事業では、「ちば学リーダー講座」のほか、「オンデマンドリカレント講座」や「大賀ハス開花70周年記念事業」など生涯学習、地域支援に関する分野を通じて様々な地域課題解決に資する活動を展開し、改革総合支援事業(タイプ3)の申請及び5年連続の選定に繋がった。 また千葉県・千葉市が主催する「パラスポーツフェスタちば」、「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」が主催する「西千葉こども起業塾」等の様々な取り組みにも積極的に関与し、他大学等との連携も強化された。	A	A
より「大短一体」を意識した事業展開を推進し、大学だけでなく短大の社会貢献・地域連携事業の実践にも協力する。また引き続き、学園高校のボランティア活動、総合的探究活動にも協力する。	短大の稲毛キャンパス移転に向けた具体的な意見交換を開始すると同時に、短大の改革総合支援事業申請の支援やパラスポーツ振興事業「Memories of Summer」の運営を支援するなど、具体的な事業の協働や実践がなされた。 また学園系校・教育連携高校との協働事業(総合的探究授業への講師派遣等)を深めることができた。このうちオルガ室員の講師派遣は15校に実施した。	B	B
感染症拡大防止に最大限配慮しながら、生涯学習センター講座の再拡大に努める。特に資格取得講座の充実、経営人材育成アカデミーの充実を図り、生涯学習センターの再活性化に注力する。	感染症拡大予防に配慮し、4月から受講定員を減らしつつも2教室体制での講座運営を再開し、年間で371講座(正課科目の開放16講座を含む)を提供し、単年度の新規受講登録者を300名を超えた。「国内旅行業務取扱管理者」講座などの新規講座も多数企画・提供したが、収支が均衡しない状況が続いている。 「経営人材アカデミー」は2コースを計画し、1コースは中止したが、1コース(4日間)6名の受講者を得た。	C	B

6. 次年度の展望

2023年度組織目標および職責表を、以下の通り定めた。

① 組織目標

令和5年度は、「千葉敬愛学園ビジョン2030」に示されている「地域の伴走者」としての学内外からの期待を的確に捉え、与えられた環境の下、最善の取り組みをめざす。

1. 総合地域研究所と協力して、「千葉」という地域の特性に根ざした地域貢献事業を推進し、正課・正課外を問わず、全学的に学生・教員・地域経済との相互連携の循環を進める。例えば、
 - ・ちば産学官連携プラットフォーム事業への参画
(文部科学省私立大学等改革総合支援事業への選定を含む)
 - ・ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム事業への参画
 - ・震災伝承に視点をおいた学習活動に資する事業
 - ・パラスポーツを通じた共生社会の実現に資する事業
 - ・千葉県、千葉市との協働事業
(千葉市の「千葉開府900年」におけた取り組みを含む)
2. 今年度末の短大稲毛復帰を見据え、「大短一体」をより意識した事業を推進するとともに、系列高校や教育連携高校での社会貢献の実践にも積極的に協力する。
3. 生涯学習事業の持続可能性を意識した運営や講座設計に取り組み、「人生100年時代」によりふさわしい事業内容を実現するため、生涯学習センターの講座運営及び収支管理の厳格化に注力する。
4. 所管業務に遺漏なく業務品質の向上を図るため、室員一人ひとりが健康に留意しながら自己啓発に努める。

② 職責表

学長	管理職	室員	担当業務
中山学長	藤森 センター長 (室長兼務) ○労務管理 ○予算管理 ○大学事務局長及び各室との業務調整 ○生涯学習センター 防火管理者	鈴木紀(専) オルガ(嘱) →他部署とも連携 安田(嘱) 佐藤(臨) 田内(臨) 笠松(臨・短) 蓬菜(臨・短)	○産学官連携関係 主務者:藤森 ・千葉県、千葉市、稲毛区等との連携事業 ・高校等、地元企業等および教職員との連携事業 ・ちば産学官連携プラットフォーム事業 ・ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム事業 ・文部科学省私立大学等総合改革支援事業の申請 ・震災や災害の伝承教育事業 ○街づくり活動支援関係 主務者:藤森 ・「稲毛の街をもりあげ隊」事業(町内自治会、避難所運営委員会、大型イベント等) ・パラスポーツを通じた共生社会の実現に資する事業 ○ボランティア活動支援 主務者:鈴木紀 ・学生のボランティア活動支援、紹介・斡旋、指導助言 ・ボランティア関係団体(社会福祉協議会、ボランティア団体等)との連絡調整 ・「千葉県夢チャレンジ体験スクール」実務 ○事務室一般関係 主務者:鈴木紀 ・予算実績管理、備品管理、経理管理等 ・ちば産学官連携プラットフォーム事務局担当 ・短大「離職者等支援事業」キャリアカウンセリング担当 ○生涯学習支援関係 主務者:安田 ・「より魅力的な」生涯学習事業の運営 講座の企画、受講生の募集 受講生データ管理(システムによる管理) 講座の運営(学外講座における引率等も含む)

なお自己点検・評価委員会で取りまとめる年報（アニュアル・レポート）では、「課題9：社会連携・社会貢献」に、次の点が地域連携センターの「次年度への課題」として挙げられている。

「ちば産学官連携プラットフォーム」、「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」を有効に活用した地域連携・社会貢献、生涯学習、産学官連携を推進すると共に、千葉市役所や稲毛区役所とより密接な連携を深めて、地元ならではのニーズを把握し、学生・教職員が共に取り組める場を提供することが課題である。

また「中期計画‘24」に基づく2023年度の事業計画は、以下の通りである。

中期計画‘24		2023年度事業計画
目標	計画	
1. 学生と地域との連携、大学間連携、産学官連携を推進し、地域連携センターが学園の地域連携活動の総合窓口としての役割を果たす。	1-1 ボランティア活動に加え、サービスラーニングの充実に注力し、学生が地域に学ぶ正課外活動の実践を目指す。	地域連携センター及び総合地域研究所が、それぞれの持ち味を活かしながら、引き続き「千葉(市)、稲毛」の特性に根ざした地域貢献事業を推進し、正課・正課外を問わず、全学的に学生・教員・地域経済との相互連携の推進する。
	1-2 「ちば産学官連携プラットフォーム」のスキームを活用し、参画大学・短期大学間をもとより、千葉市、市内産業界とも連携した取組を推進、他大学を含む産学官連携の充実を図る。	ちば産学官連携プラットフォーム事業で主担当を務める生涯学習等で引き続き事業を牽引し、改革総合支援事業(タイプ3)の継続的な選定に努める。また「ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム」「パスポートフェスタちば」等の取り組みを通じて、千葉県や千葉市、他大学等との連携を継続・充実させる。
	1-3 短大の稲毛キャンパス移転を機に、大学だけではなく学園全体の地域連携活動の窓口としての役割を認識し、幅広い社会貢献活動を展開する。	2024年春のキャンパス統合を円滑に行うため、大学・短大双方の事業の精査や継承を適切に行う。また系列校や大学・短大双方の教育連携校との協働を推進し、幅広い社会貢献活動を推進する。
2. 生涯学習講座やリカレント教育の充実により、生涯学習センターを生生涯学習・リカレント教育の地域拠点として確立する。	2-1 「老後の学び」から「生涯にわたって学び続ける生き方」にシフトした教育コンテンツを提供するため、リカレント教育や履修証明プログラム等のメニュー開発を検討する。	感染症拡大防止に最大限配慮しながら、市民の幅広いニーズに応えられる生涯学習センター講座を展開する。特に語学講座や資格取得講座、教養講座の充実を図り、市民のウェルビーイングの達成に寄与する。ただし生涯学習センター事業は身の丈にあう規模への見直しを行うこととし、提供講座数を年間200講座、受講生数を年間のべ1000名を目標とする。

2023年度はこれらの課題や事業計画を克服するため、まず2022年度までの事業を本年報で総括し、特に生涯学習センターのありかたについて他部署、他大学、関係機関と連携して、より深みのある地域との連携、社会への貢献の充実を図り、「地域の伴走者」としての確たる実績を積み重ねていきたい。

複数年にわたり新型コロナウイルス感染症により失われた日常は、感染症としての位置づけが政府や世界レベルで見直され、沈静化に向かいつつある。この間全てを元通りにするという発想ではなく、この間の経験を活かしながら「今ならできること」に向かい、近年話題になっている新しいキーワード「ウェルビーイング (well-being)」の達成に寄与できるよう努めたい。

以上

私学経営



36 敬愛大学

心組の私学私学経営研究会

◎ 東京「地域おこし協力隊」地域人材の活用と発展



「地域の伴走者」 敬愛大学の地域連携活動

敬愛大学 地域連携センター センター長 藤森 孝幸

1. はじめに

1966(昭和41)年に開学した敬愛大学は、50有余年の歴史を築き、現在は3学部4学科の体制で、次代を担う若者の育成に努めています。本学の名称は学問の精神「敬愛人」によるものですが、これは「敬愛」の語源の一つ、「敬は天徳自徳の徳にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も敬む、天を敬ふゆゑ、我を敬する心を取り入るを学んば、敬愛の徳に達す。敬愛の徳に達せば、敬愛の徳に達す。1921(大正10)年に女学院として創立するにあたり基本精神としたことと由来します。この精神の精神を具現化するため、2014年に「地域との関わりを重視し、育むべき学園運営すること」地域の伴走者」が学園理念の方針の一つとして明示され、現在に至ります。地域連携・社会貢献活動にはかかちかち様々な活動を取り進んでまいりましたが、学内外の連絡調整、そして「情報公開」による事業の不安定な影響を受けて、地域連携センターを2017年4月に改組し、その成果を報告いたします。

2. ボランティア活動、まちづくり活動

地域連携センターでは、学内外でのボランティア活動を促進し、正気な道徳性のある学生の成長を促しています。このため、教育支援、地域活性化、「災害復興支援」などの場

- (1) 「災害復興支援」
- (2) 「災害復興支援」

12 私学経営 15833 2022.6

『私学経営』(第568号)

三者が5つの向上を目指します

- 1 地域の高等教育の「魅力」の向上
- 2 「学生募集力」の向上
- 3 地域の「地元企業への就職率」を向上
- 4 「多様な学び」の価値の向上
- 5 「まち」としての魅力の向上

12の私立大学と千葉市、産業界が連携する ちば産学官連携プラットフォーム

市民に向けた「ちば学リレー講座」を敬愛大学生涯学習センターなどで開催中

敬愛大学の藤森孝幸・地域連携センター長

地域の発展や課題解決を目指す 「ちば産学官連携プラットフォーム」

「ちば産学官連携プラットフォーム」は、2018年8月に設立されました。本プラットフォームは、千葉市の課題解決を目指すことを目的としています。

例えば、18歳人口の急激な減少は各大学にとって喫緊の課題ですが、就労人口の減少にもつながるため、行政や産業界にとっても課題となっています。さらに千葉市は卒業生の多くが東京の企業に就職するという独自の課題も抱えています。そこで、千葉市への就職を促進するため、地元企業と学生をマッチングする場を合同で設ける取組をしています。

また、千葉市の子どもの社会参画事業の一環である「千葉市子ども若者市役所プロジェクト」に協力し、高校生や大学生がワークショップを通じて交流しながら楽しく、「まちづくり」や「地域課題の解決」に取り組む活動を行っています。

千葉市と市原市、佐倉市にキャンパスがある12の私立大学が参画し、千葉市や産業界と連携する「ちば産学官連携プラットフォーム」。主に生涯学習事業を担当する敬愛大学の藤森孝幸・地域連携センター長に、このプラットフォームの目的や「ちば学リレー講座」などの取り組みについてお話を伺いました。

ちば学リレー講座:ちばの地域デザイン

教職員の専門性を活かした「ちば学リレー講座」が好評

プラットフォームが発足当初から積極的に展開しているのが「ちば学リレー講座」です。参画校の教職員がそれぞれの専門性を活かし、概ね毎月1回地域住民に向けて無料で提供するもので、千葉(市)に關する歴史や福祉、健康、食、自然などさまざまな分野から幅広く提供していきます。千葉市職員にも講師として、講演していただいています。

会場は基本的に敬愛大学生涯学習センターですが、12月24日(土)の講座、「千葉市のシェアリングエコノミー」(大賀ハス 開花70周年事業)については、生涯学習センターで開催しました。

「二十代生の英語力向上」

また、新型コロナウイルス感染症拡大防止として、講座を収録した動画によるオンデマンド配信も実施しています。この講座はシニア世代のリピート率が非常に高いことが特徴ですが、テーマによっては現役大学生などが一緒に受講することもあります。

講座を開催しており、小学生から若者、主婦、シニア世代まで、幅広い世代の「学びたい」というニーズにきめ細かく応える学習機会を提供しています。

プラットフォームの今後の展開・目標について

本プラットフォームのスローガンは「競争から共創へ」です。一見ライバル関係にある近隣の大学が機にならなれば、市や産業界とともに、地域のニーズにもっと応えていく。そのために、それぞれの大学の特色や強みを生かしながら、新たな社会的価値を「共創」していくことを目指しています。

なお、市内の公民館や町内自治会へ、参画校の教職員を講師として派遣しています。現在は防災関連のニーズが高く、多くの相談を受けていますが、防災以外でも学びたいテーマがありましたら、お気軽にご相談ください。

『まなびの森』(Vol.34)

地域連携センター 事業報告（2022年度）

（別表）

【主催事業】

カテゴリー	事業名	時期	関係機関	参加人数
主催事業	パラボランティア同窓会2022 (東京2020 in CHIBA レガシープロジェクト)	8/29	植草学園大学、千葉大学、帝京平成大学、 日本ソフトパラフェンシング協会	18名 (うち本学学生 2名)
	震災学習スタディツアー2022	9/7~9	東日本大震災・原子力災害伝承館、関東中央自治会、 公益社団法人3.11みらいサポートほか	活動学生 22名
	第5回英語教師授業力 ブラッシュアップセミナー	11/27	千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、 千葉県私立中学高等学校協会	67名 (うち本学学生 22名)
協働事業	映画「ひまわり」特別上映会 @TIPSTAR DOME CHIBA (ちば産学官連携プラットフォーム協働事業)	6/1	株式会社レインカラーズ、在日ウクライナ大使館	50名 (うち本学学生 2名)
	YohaS 2022 Blooming NIGHTS (ちば産学官連携プラットフォーム協働事業)	6/9~11	YohaS運営事務局、株式会社拓匠開発、千葉市	98名 (うち本学学生 30名)
	千葉県夢チャレンジ体験スクール 「キャリア教育ごと体験スクール」	8/16~19	千葉県教育庁生涯学習課	活動学生 7名
	パラスポーツフェスタちば2022	9/3	千葉県環境生活部生涯スポーツ振興課、 千葉市生活文化スポーツ部スポーツ振興課	活動学生 15名 (うち学生実行委員3名)
	敬愛大学パラスポーツ交流会(ソフトパラフェンシング)	10/15	千葉市、日本ソフトパラフェンシング協会	活動学生 2名
	千葉市スポーツレクリエーション祭(ポッチャの部)	11/6	ポッチャ同好会、高洲スポーツセンター	9名 (うち本学学生 6名)
	小学生を対象とした模擬選挙 (模擬市長選挙の候補者役等)	11/15、24	千葉市選挙管理委員会、千葉市立寒川小学校、 千葉市立みつわ台南小学校	活動学生 7名
	フードバンクちば 食糧仕分けボランティア (ちば産学官連携プラットフォーム協働事業)	2/17	フードバンクちば、 ちば産学官連携プラットフォーム	活動学生 2名
	第4回いなげポッチャカップ	2/19	稲毛区地域振興課、ポッチャ同好会、 千葉大学、千葉経済大学・短大	活動学生 14名
	大学等学生ボランティア・ボランティア担当職員 ・市町村社会福祉協議会担当職員情報交流会	3/1	(社福)千葉県社会福祉協議会	発表学生 1名
	第1回大学対抗シッティングバレーボール交流大会	3/4	千葉市、千葉市スポーツ協会、千葉パイレーツ、 千葉県障がい者スポーツ・レクリエーションセンター	活動学生 6名
	千葉市こども若者市役所 (ちば産学官連携プラットフォーム協働事業)	通年	千葉市こども支援課、 ちば産学官連携プラットフォーム	本学学生のべ9名
	大賀ハス開花70周年記念学生ワークショップ (ちば産学官連携プラットフォーム協働事業)	通年	千葉市緑政課、千葉商工会議所、 ちば産学官連携プラットフォーム	活動学生 2名
教育連携事業	総合的探求の時間(1年) Inage Image 講師派遣協力	通年	敬愛学園高等学校、千葉市広報広聴課ほか	-
	総合的探求の時間(1年) 指導助言、審査講評	11/28、12/5	千葉市教育委員会教育改革推進課、 千葉市立稲毛高等学校	教職員のべ5名
	グローバル企業見学会(コーディネイト)	9/29	千葉市立稲毛高等学校、 千葉共同サイロ株式会社ほか	10名 (高校生6名含む)
産学官 連携事業	ちば産学官連携プラットフォーム	-	淑徳大学、千葉経済大学、千葉敬愛短大ほか 計11大学・短期大学	-
	ちばアントレプレナーシップ教育コンソーシアム	-	千葉市、千葉大学、千葉経済大学、企業・団体	2名

【活動への紹介・助言を行った事業、学生を派遣した事業】

カテゴリー	事業名	時期	派遣先	のべ派遣人数
②地域活性化 ボランティア	千葉市障害者スポーツ大会 大会運営補助	5月中旬	千葉県障がい者スポーツ協会	事業中止(コロナ禍)
	稲毛せんげん通りまつり	7/14・15	稲毛せんげん通りまつり実行委員会	事業中止(コロナ禍)
	稲毛東5丁目 納涼盆踊り大会	7月下旬	稲毛東5丁目自治会	事業中止(コロナ禍)
	稲毛駅前月イチ清掃ボランティア	通年	いね稲毛実行委員会	のべ18名 (うち学生12名)
	第15回稲毛あかり祭「夜灯」	11月下旬	稲毛あかり祭夜灯実行委員会	事業中止(コロナ禍)
	穴川コミュニティセンター避難所運営委員会 避難所開設・運営訓練	11/29	穴川コミュニティセンター避難所運営委員会	当日参加なし (運営委員会には職員出席)
③災害復興支援 ボランティア	災害ボランティア活動	通年	千葉県内ほか近隣被災地	実績なし

【学生が自主的に活動している事業】

カテゴリー	事業名	時期	関係機関	参加人数
①教育支援 ボランティア	教育ボランティアサークル Iris	通年	千葉市美浜区役所、高浜ショッピングセンターほか	活動学生 のべ60名
	教育ボランティアサークル 放課後こども教室	通年	千葉市生涯学習振興課、 轟町小学校放課後こども教室	-
②地域活性化 ボランティア	ボランティアサークル Love and Action	通年	※活動再開に向けて助言を行った。	-
	穴川町会 盆踊り	7/23	穴川町会	活動学生 9名
④大学横断型 ボランティア	ボランティアサークル ちばくりん敬愛支部 (ちーあいふれあいの庭)	通年	千葉市緑政課、千葉大学環境ISO委員会	活動学生 のべ20名

敬愛大学地域連携センター

年次報告書 2022年度(令和4年度)

2023年 5月 15日 発行

編集・発行 敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県稲毛区穴川1-5-21

TEL 043-251-6364 (直通)

FAX 043-284-2261 (直通)

URL http://www.u-keiai.ac.jp/research/renkei_center/

MAIL crc@u-keiai.ac.jp



本冊子には、見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。